

4-2. ボランティア活動

1. ボランティアの種類・活動内容

01. 救援物資の受け入れ・仕分け・配付などの活動を主に行った。

今回の地震災害では、救援物資の受け入れ窓口となった檜山地方本部や最も被害の甚大であった奥尻町を中心に、日赤奉仕団のほか個人、企業、団体などの多くのボランティアが活躍し、被災者の円滑な救援に貢献した。[『平成5年(1993年)北海道南西沖地震災害記録』北海道(1995/3), p.83]

檜山地方本部や奥尻町をはじめとする被災町村においては、救援物資の受け入れ、仕分け、被災者への配付などの活動を行った。また、遺体の棺の提供や安置作業のノウハウなどの協力を行った。[『平成5年(1993年)北海道南西沖地震災害記録』北海道(1995/3), p.83]

被災地周辺では、救援物資の輸送手段が不足していたことから、車両や舟による物資輸送を行ったほか、地撃発生直後、奥尻町は離島である上に、定期航路が使用できなくなったことから、救援要員や物資をヘリコプターなどで輸送した。[『平成5年(1993年)北海道南西沖地震災害記録』北海道(1995/3), p.83]

避難所において炊出しを行ったほか、江差町や函館市内で調理したものを奥尻町へ空輸するなどの活動もあった。[『平成5年(1993年)北海道南西沖地震災害記録』北海道(1995/3), p.84]

応急仮設住宅へ、冷蔵庫、炊飯器、洗濯機、その他日用品など救援物資の搬入を行ったほか、入居の際の引越しの援助も行った。[『平成5年(1993年)北海道南西沖地震災害記録』北海道(1995/3), p.84]

02. 檜山地方本部の把握ではボランティア活動者は合計延べ9,000人となっている。

檜山地方本部が把握している救援物資の受け入れ、仕分け、配付などに従事したボランティア活動者数は、奥尻町において7/13-10/29の間に延べ5,468人、江差町において7/15-10/7の間に延べ3,532人、合計延べ9,000人となっている。[『平成5年(1993年)北海道南西沖地震災害記録』北海道(1995/3), p.84]

03. 組織化されたボランティア団体は4つに大別される。

奥尻島で活動したボランティアの中で、比較的組織化されていたものは、(1)日本赤十字社、(2)宗教団体、(3)学校、(4)企業・労働組合などに大別される。[『災害の心理学とその周辺 - 北海道南西沖地震の被災地へのコミュニティ・アプローチ - 』若林佳史(2003/5), p.142]

04. 日本赤十字社(北海道支部)のボランティア活動

日本赤十字社北海道支部の北海道南西沖地震の際の活動は多岐にわたり、その全貌は日

本赤十字社北海道支部(1994)「平成5年北海道南西沖地震 救援・救援活動記録集」に詳しいが、代表的なものとしては 状況収集、物資の提供、医療救援活動(救護班)、救援活動(奉仕団)がある。

05. 日本基督教団(北海教区)のボランティア活動

災害時の奥尻島に渡っての救援活動は、(1)直後の北海教区各地の教会の牧師らの情報収集を兼ねた先遣隊的活動(テント持参で自炊生活)、(2a)7月末以降の、北海教区を通じた、役場に登録し個人単位あるいは教会単位での救援物資の仕分けなどの活動(テント生活を予定していたが公民館で宿泊となるまた食事は自炊を予定していたが公民館で提供された。旅費などは後に教区から支払われた)、および(2b)10月12日~30日までの、町役場から「要請」を受けての、北海教区を通じた、団体としての救援物資の搬入活動(公民館で宿泊。食事は公民館で提供された)、さらには(3)江差伝道所(北海教区道南地区委員会)を中心とした、被災者と共にお茶を飲み話をしながらの救援物資の手渡し(日帰り)に大別される。いずれも自動車がちこまれた。全過程にわたって北海道の教会の教会員が中心的に活動したが、また(2a)は青森県のある教会の教会員も活動した。(1)は男性のみ、また(3)は女性を中心となって行った。[『災害の心理学とその周辺 - 北海道南西沖地震の被災地へのコミュニティ・アプローチ - 』若林佳史(2003/5), p.144-145]

06. 北海道YMCA(キリスト教青年会)のボランティア活動

北海道南西沖地震の際には、奥尻に関する情報は、当初、奥尻に情報源がなく、マス・メディアからのものと日本基督教団北海教区ならびに江差伝道所などから入手したものに限られていたが、のちに北海道青少年団体連絡協議会会長から奥尻青年会長をも務める奥尻町役場職員B氏を紹介され、詳しい情報を得ることができるようになった。被災地に迷惑をかけないように、テント・炊事道具などをワゴン車1台に積み札幌を出発。奥尻では、持参したテントで宿泊するが、地域の公共施設が空いているときはそこに泊まった。食料品を現地で調達し朝食・夕食は自炊、昼食は役場から支給の弁当。[『災害の心理学とその周辺 - 北海道南西沖地震の被災地へのコミュニティ・アプローチ - 』若林佳史(2003/5), p.146]

07. 日本メノナイト・キリスト教会協議会のボランティア活動

日本メノナイト・キリスト教会協議会は日本にあるメノナイト派の一つで、北海道で1951年以来活動している。日本での災害救援活動は始まったばかりであろう。奥尻島へは、北海道に住む信者5人(全員男性。年齢は21~59歳、平均40歳)が物心の援助を目的として、西瓜200個と、テント・炊事道具・食糧・スコップなどをもって自動車で渡り、8月14~15日の2日間、役場に登録されたボランティアとして救援物資の搬入と仕分けに従事した。公民館で宿泊、昼食は役場からの弁当。もっとも、彼らが奥尻に入る前に得て

いた情報は、マス・メディアからのものと、道庁や役場に問い合わせ得られたもの以外にはなく、予期した作業と実際の作業とのあいだで若干の食い違いが起きた。問い合わせに対してある人は「あまり活動できなかった」と答えていた。また、持参した西瓜の配布を町役場に託したが、夏季でなまものは腐敗しやすく、残念ながら必ずしも活かされなかったと考えられる。『北海道新聞』(7月18日)に「送らないで腐るなま物」という記事が載っていたのは皮肉なことであった。ただし、これを機会に、MDS から災害マニュアルを取り寄せ、それを翻訳するに至った。[『災害の心理学とその周辺 - 北海道南西沖地震の被災地へのコミュニティ・アプローチ - 』若林佳史(2003/5), p.147-148]

08. 札幌シオン教会(日本フォースクエア福音教団)のボランティア活動

日本フォースクエア福音教団は、戦後、中国を追われた宣教師によって設立されたペンテコステ派のキリスト教団体である。北海道南西沖地震の際には、(1)アガペ・ハウスの呼びかけに触発されて、教会員の女性3名と男児1名が8月3日から6日まで、教会としてというよりも個人として活動した。活動後に、教会に集まった献金から旅費が支払われ、結果的に教会が後ろ楯となる形となった。(2)続いて、別の信者(女性3名。年齢は21~30,平均26歳)も9月1日から4日まで奥尻で活動(救援物資の搬入と仕分けと配送)した。いずれも公民館宿泊であった。各種情報は、マス・メディアからと、(1)においてはアガペ・ハウスから、(2)においては、先に活動した(1)のボランティアから得られた。同教団の函館シオン教会の教会員も活動した。[『災害の心理学とその周辺 - 北海道南西沖地震の被災地へのコミュニティ・アプローチ - 』若林佳史(2003/5), p.148]

09. 救世軍のボランティア活動

北海道南西沖地震後における活動は以下の通りである。救援物資の仕分けなどは行わなかった。

7月13日 各地で「社会鍋」開始。

7月15日 「北海道南西沖地震災害慰問第一班」(8名)を編成し、車両3台で東京出発。以降、函館小隊をベースとする。

7月17日 上記の8名に北海道連隊の2名、および日本基督教団の2名を加えた計12名で奥尻に入り、慰問品と機関紙を手渡す(日帰り)。

7月24~25日 本営の3名と北海道連隊の7名で「第二班」を編成し、奥尻町で慰問活動(小学校で一泊)、瀬棚町でも慰問活動。

7月28日 函館小隊を中心に「第三班」を編成し、大成町で慰問活動(日帰り)。

8月16日 ユース・キャラバン参加者で「第四班」(12名)を編成し、島牧村で慰問活動(日帰り)。

[『災害の心理学とその周辺 - 北海道南西沖地震の被災地へのコミュニティ・アプローチ - 』若林佳史(2003/5), p.148]

10. 福音教団花園キリスト教会(日本福音キリスト教会連合)のボランティア活動

日本福音キリスト教会連合の傘下の教会のうち被災地に最も近い函館市の花園キリスト教会が窓口となり、7月17日に同教会の牧師と役員が奥尻に入り、役場を訪れ、仮設住宅の居住者に対して見舞い金とキリスト教に関する書物を配布した。翌年(1994)5月にも奥尻を再訪し仮設居住者に見舞い金を手渡し、さらに翌々年(1995)の5月に再度奥尻を訪れできるだけ被災者と話をすることに努めた。当初、救援物資を送ることを考え、全国の傘下教会に呼びかけたが、物資が余っていることを知り、義援金だけの募集に変更した。奥尻には同教会連合の教会の教会客員1名がいるが情報は、マス・メディアと町役場から、そして牧師と役員が直接奥尻に行くことによって得られた。救援物資の仕分けなどのボランティア活動には従事しなかった。[『災害の心理学とその周辺 - 北海道南西沖地震の被災地へのコミュニティ・アプローチ - 』若林佳史(2003/5), p.149-150]

11. 仏教のボランティア活動

災害直後より、各宗派および仏教系各団体はそれぞれ、本部にまた北海道に「対策本部」や「対策委員会」を設け、被災地にある自宗派の寺院から情報を集めるとともに、広く募金を呼び掛け、集まった義援金をとりまとめ、奥尻町(役場)に持参し、あわせて被災寺院を見舞い、また法要を営んだ。[『災害の心理学とその周辺 - 北海道南西沖地震の被災地へのコミュニティ・アプローチ - 』若林佳史(2003/5), p.150]

12. 立正佼成会のボランティア活動

奥尻町は函館教会江差支部の活動地域に入り、島内にも多数の教会員がいる(奥尻地区で68世帯、青苗地区で70世帯という)。当初、「災害対策各機関では、情報が交錯し、救援活動の状況を把握するのは難しい」(『佼成新聞』8月6日付)ため・島内の会員からの情報および協力によって支援活動が開始された。後には、町役場の「要請」を受けてボランティアを行うようになった。[『災害の心理学とその周辺 - 北海道南西沖地震の被災地へのコミュニティ・アプローチ - 』若林佳史(2003/5), p.150-151]

13. 天理教のボランティア活動

平素は「ひのきしん」と呼ぶ多様な奉仕活動を行い、災害時には「災害救援ひのきしん」と呼ぶ救援を行う。(中略)ひのきしん隊は情報、物資、人員、資材、経験いずれの点においても能力の大きい組織である。しかし、水災害では「すぐ出動すべき」「しばらく待つべき」という両論があり、結果的に出動が遅れた。これに関して、天理教自身は日時がちょうど宗教的行事と重なったことも一因と説明している。しかし、これ以外に、ひのきしん隊自体が持つ原因もあるかもしれないと考える。同隊はこれまで資材や食糧を自分たちで賄う本格的な救援活動を行ってきた。しかし、奥尻の場合、被災直後はフェリーが欠航し、フェ

リー再開後もしばらくは車両の乗船は公的なもの緊急なものに制限されており、本格的活動を行おうとするとかえって小回りが利かなかったのであった。なお、死別を経験した被災信者の中には、天理教の信仰の中心である「ぢば」に参拝し守護をいただき、「ひのきしん」を行い、安らぎを得た者もいた。[『災害の心理学とその周辺 - 北海道南西沖地震の被災地へのコミュニティ・アプローチ - 』若林佳史(2003/5), p. 152-153]

14. 一燈園大学のボランティア活動

奥尻島には、教職員、高校生、高校専攻科生などの計15名(男性9名、女性6名)が赴いた。要した費用は世界中の困っている人のために行われる断食(「一宿両餐」という)によって得られた食事代を積み立ててあった分と寄付とによってまかなわれた。もとより、校長氏の意見では「いつも人に迷惑をかけていることに対するつぐない」「生かされていることの感謝」としての活動であった。天あるいは自然に任せることを大切にし、どんな事態でも受け入れる柔軟さを有し、ボランティア活動の不効率に関する批判は認められなかった。奥尻から帰って、ある参加学生はブームとなった救援に反発していた。またある参加学生は他人から「いい経験をしましたね」と言われていたが、他者の不幸の上に「いい経験」があることにとまどい、そう言われることに抵抗を感じていた。それを校長氏は暖かく見守っているように見えた。[『災害の心理学とその周辺 - 北海道南西沖地震の被災地へのコミュニティ・アプローチ - 』若林佳史(2003/5), p. 155]

15. 国土館大学のボランティア活動

学内の二つのサークルが「国土館大学学生有志」を結成し、「奥尻島エイド」という名称の活動を興し、街頭で募金を募る(7月20~28日)とともに、被災地でのボランティア活動を計画した。実際に奥尻に行ったのは、同両サークルと海外ボランティア組織および一般学生のなかの希望者計18名(男性16名、女性2名)、ならびに同ボランティア組織の責任者(大学職員)とカメラマンの合計20名であった。7月24日に出発し、25日から8月1日まで、救援物資の仕分けと配送に従事した。テントを持参するが、体育館で宿泊し、自炊生活。財政的には同窓会などの後援があった。ボランティア生活中における参加学生のミーティングの言動からは、当初被災者の間近で作業したいという希望をもっていた彼らが次第に自分たちの行っている地味な仕事の意義を見いだしていく過程が推察された。[『災害の心理学とその周辺 - 北海道南西沖地震の被災地へのコミュニティ・アプローチ - 』若林佳史(2003/5), p. 156]

16. ボランティア活動についての整理

災害後に奥尻島内で行われた民間の救援活動は以下のようにまとめることができる。津波で流され海岸にうちあげられた家屋の柱や梁などの整理と焼却、救援物資や人員の輸送(札幌への輸送も含む)、学校の体育館などに運ばれてくる救援物資を搬入し・仕

分け、被災住民に配布すること、使用不能あるいは貰い手のない救援物資の移送 医療などの専門的な特殊作業、慰問品の戸別配布、その他のその都度の活動(死体安置所の掲示板を見に来た人へのお茶出し、避難所に届く郵便物の整理、避難所のトイレの点検、倉庫内の救援物資のリストの作成、避難所周辺の清掃、給水、仮設風呂の管理、仮設住宅への引っ越し手伝い、洗濯の手伝い)。このうち、～ は役場などの公的機関の指示をうけたもので、～ は指示によらず自ら作業を見いだすものであった。また、上記と およびボランティアの移動は、運転手付きで提供された運送会社のトラックが用いられた。[『災害の心理学とその周辺 - 北海道南西沖地震の被災地へのコミュニティ・アプローチ - 』若林佳史(2003/5), p.162-163]

17. ボランティアの生活

ボランティアの生活は、 宿泊場所(日帰りか、テントを持参せず公共施設に宿泊したか、テントを持参したが公共施設で宿泊したか、持参したテントで宿泊したか) , および 食事の様態(炊事道具を持参しなかったか、炊事道具を持参したが用いなかったか、炊事道具を持参し昼食をも自分たちで作ったか)によって分類することが出来る。[『災害の心理学とその周辺 - 北海道南西沖地震の被災地へのコミュニティ・アプローチ - 』若林佳史(2003/5), p.163]

2. ボランティアの受入と組織化

01. ボランティアの数はおびただしい数に上った。

北海道南西沖地震で直接、奥尻に足を運んでボランティア活動をしてくれた団体は赤十字奉仕団をはじめ、企業、宗教団体などのグループから、個人の資格で参加した一般の社会人・学生など、実におびただしい数に上る。[『北海道南西沖地震奥尻町記録書』奥尻町(1996/3), p.196]

02. 地震直後はボランティアの来島を遠慮してもらった経緯がある。

救援物資の運搬・収集・分類・仕分けなどの必用人員(約100人)を除けば、奥尻島の場合、基本的に震災後しばらくはボランティアの来島を遠慮してもらった経緯がある。これはあくまでも混乱を避けるためであり、そのためボランティア志願者のみなさんからはずいぶん不満の声も出たようだが、仕方がない措置であった。本記録書の編集部としては、この紙面を借りて改めてお詫びを申し上げておきたい。しかし、島内の受け入れ態勢もほぼ整った8月からは、それまで待機してきてくれた社会人・学生グループなどのボランティアが合流。夏休みを返上したうえ、実に熱心に、地道でつらい作業をこなしてくれた。これもまた、この場に特記し、永遠に記憶しておかなければならない事柄だろう。[『北海道南西沖地震奥尻町記録書』奥尻町(1996/3), p.196-197]

03. ボランティア活動経験のある企業や団体を中心に組織的な活動ができた。

平素からボランティア活動を行っている企業や団体などは、指揮系統が明確であることから組織的な活動ができたほか、輸送業者は物資の取扱いの経験を生かすなど、大量の救援物資の受入れ、仕分け、配付などに大きな力を発揮した。[『平成5年(1993年)北海道南西沖地震災害記録』北海道(1995/3),p.84]

04. ボランティア活動にも専門技能を要する活動があることを認識しておく必要がある。

まず第一には、それぞれの被災ケースによって、必要とされるボランティア支援活動の種類も人数も、やはり違うという認識の重要性だろう。たとえば救援物資の運搬や仕分け・分類などは特別の技能を必要としないのである程度の人海戦術はとれるが、医療関係や土木、建築関係などには、たとえボランティアといえどもある程度の専門技能は必要なのだ。そのへんの事情を考えず、自分の希望する活動ができないからといって途中で投げ出したり、不満をいう人々もボランティアのなかにはいる。それではせっかくボランティアを志願した人も、そのボランティアの支援活動を受ける立場の側も、お互いに円滑な意思の疎通を欠いてしまうことになりかねない。[『北海道南西沖地震奥尻町記録書』奥尻町(1996/3),p.197]

05. 個人の受け入れができず、宿泊場所、食料の確保を各自で行える団体に限られた。

今回の地震に対するボランティアの活動は、日本赤十字社や宗教団体、運送会社、北海道大学など、比較的大きな組織を主体としている。活動の内容は、災害派遣や応援の機関に対する給食や被災者への給食、救援物資の仕分けなどの作業が主なものであった。災害発生初期の段階で、ボランティア希望者の問い合わせが北海道庁等に相次いだが、個人的なボランティアはすべて断っている。これは、奥尻町などの被災地が住民に対する避難所の設置や、炊出しの対応で忙殺されている状況であり、ボランティアに対する宿泊場所、食料の供給が困難であることによるものである。今回活動を行ったボランティアは、宿泊場所、食料の確保を独自に行える団体に限定されている。今回最も大きな被害を受けた奥尻町は島部であり、ボランティアの受入れには交通、宿泊、食料の確保が不可欠である。しかし、現状ではそれらの確保は難しく、人手の足りない時に有効であるボランティアの受け入れが十分行われていない。[『平成5(1993年)北海道南西沖地震 東京都調査班報告書』東京都(1994/1),p.105]

檜山地方本部には、個人や団体からボランティア活動についての多くの申し出があり、作業内容やスケジュール等の調整を行って活動に参加していただいた。なお、自ら移動手段、食事が確保できない団体など、受け入れができないケースもあった。[『平成5年(1993年)北海道南西沖地震災害記録』北海道(1995/3),p.84]

06. 奥尻島ではボランティアと称して経済的利益を得ようとする人や、布教活動等を行う人への対応に苦労した。

北海道檜山支庁では、当初「ボランティア(人的援助)は断る」という方針で対応していた。檜山支庁の説明では、奥尻島での食事や宿泊所といった受け入れ体制が整うまでは個人的なボランティア活動の申し出はすべて断ったという。奥尻町役場でも同様の回答であった。さらに奥尻町では、物見遊山気分でやってくるボランティア志願の人たちやボランティアと称して避難所に入り込んで食事をし、ごろごろしながら布教活動のようなことをやっていた人たちへの対応でも苦労している。災害発生時のボランティア活動の重要性は、あらためて指摘するまでもないが、最近では、一方で、単純労働を提供するという名目で、半ば興味半分で被災地に入ってくる人たちがいる。他方、ボランティアと称して被災地に入り、何らかの経済的利益を得ようとする人たちもいる。ボランティアと称して、このように多種多様な人たちが被災地に出入りするのであるから、その取り扱いについては行政としても慎重にならざるを得ない。[『平成5(1993年)北海道南西沖地震 東京都調査班報告書』東京都(1994/1), p.39]